漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）」の教材研究

平野博通（読み研運営委員）

１、教材文

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　李白

故 人二 黄 鶴 一

煙 花 三 月 二 揚 一

孤 遠 影 碧

 長 天

２、構造よみ

　漢詩（絶句形式）は「起承転結」で構成されている。

起　旧友である孟浩然が西の方にある黄鶴楼を立ち去ろうとしている。

承　春霞の立つ三月に孟浩然は揚州（広陵）に向けて長江を下っていく。

転　一そうの帆掛け舟が遠ざかっていく姿が青空に消えていく。

結　ただ私（作者李白）は見ているだけだ、長江が水平線に向かって流れていくのを。

　起承転結の意味を教えるのに漢詩はふさわしい教材である。起句では、小説でいう導入部のように、人物・場所・事件の設定が書かれてある。作者にとって旧友の、孟浩然と別れる場面であるということがしかけられている。

承句では、その別れが春三月であるという時の設定と揚州に下るという孟浩然の行き先が書かれている。「下る」というのは、川（長江）を下るのである。広陵（揚州）と黄鶴楼との位置関係は地図で確認しておきたい。

　転句では、一転して黄鶴楼のある近くの情景から視線が川の向こうの遠くの情景に移っていく。それとともに遠ざかっている帆掛け舟の姿が消えていく情景は孟浩然との別れを示している。別れの悲しみが後半では表わされている。舟であるのに碧空に消えていくのである。どれほど雄大な川なのか想像させられる。

　結句では、舟が見えなくなってもなお川の流れを見続けているという惜別の情が表わされている。帆掛け舟が水平線のかなたに消えてもなお見ているのである。いかに長い時間見続けているか、それだけ別れを惜しむ気持ちが強いのだろう。

３、技法よみ

　漢詩（七言詩）では押韻の位置が決まっている。第一句末と偶数句末である。「楼」「州」「流」である。承句の「州」は「揚州」の州である。題名にある「広陵」と同じ場所を表す地名なのに、なぜ、詩は広陵でなく揚州なのかと考えさせると、押韻のためだということが理解できるだろう。押韻は本来中国語の発音なので、わかりにくいが、漢字を音読みしてもほぼ間違いないだろう。「広陵」のリョウと「揚州」のシュウ。「流」のリュウと近い発音はなんとなくわかるだろう。発音がわからないので、授業ではそこまで深入りはできないが、押韻について考えさせるきっかけにはなるだろう。

　結句には、倒置法が使ってある。語順を入れ替えることで、ただ見ていることが強調されている。しかし、もともと中国語では、日本語と語順が違っている。主語＋述語＋修飾語という順番であるため、日本語では、述語を最後に読むようにしなくてはならない。原文では、もともとの中国語そのものである。むしろなぜこれが倒置法になっているのだろうか。作者李白が倒置法にしているわけではないのだろう。そもそも中国語に倒置法という概念はあるのだろうか。後の時代の日本人が漢詩を日本語に訳すときに、訓読文に返り点をつけなかったことが、倒置法として理解することにつながったのだろう。今見られる書籍はほとんどのものが倒置法として訳している。「長江の天際に流るるを唯見る」という書き下し文はほとんど見られない。結句にあえて返り点をつけさせてみて、倒置法と通常の文で、どちらの書き下し文がこの詩にはよいのかを考えさせるとよいだろう。

４、主題よみ

　李白が旧友孟浩然との別れを惜しんでいる心情。

　この詩のもっとも大きな変化は、転句のところである。前半は春のおだやかな別れの場面で、後半は孟浩然が去ったあとも長い時間そちらを見続けているという惜別の情が表れているところである。李白にとって孟浩然がどういう友達であったかを考えさせることができる。ただの友達であったら、舟にさようならと手を振ってお別れである。しかし、李白は立ち去りがたい様子で、川の流れを見続けている。いつまでも見続けているような友達はどんな友達であろうか。そこまで悲しむということは、もう二度と会えないような一生の別れになっているのだろうか。そんなことを想像させられる。

５、授業の実際

Ｔ　結句に「唯だ見る長江の天際に流るるを」とあるけど、ここに使ってある技法はなんだろう？　押韻以外に。

Ｃ　倒置法。

Ｔ　これ倒置法でない言い方に直すとどうなる？

Ｃ　ただ長江の天際に流るるを見る

Ｔ　では、どこにどんな返り点をうつとそうなる？

Ｃ　「見る」の下に「二」、「流るるを」の下に「一」

Ｔ　そうだね。でも、考えてみたら、これって普通の中国語の語順だね。中国人である李白が返り点をうつはずないね。昔の日本人が返り点を打たなかったということだね。なんであえてうたなかったんだろう。

Ｃ　「長江の天際に流るるを」を強調したかった。

Ｔ　倒置法のときに、強調されるのはどこ？「私は机の上の教科書を見る」だと何を見るかが大事。「私は見る、机の上の教科書を。」だと何を見るかより、見ている行為そのものが大事。だから何を強調？

Ｃ　「見る」を強調したかった。

Ｔ　そうだね。ただぼーっと見ているだけだ。川には何もない、孟浩然の舟も見えない。何もないところを見ている。つまり、孟浩然との別れの悲しみを引きずっているんだね。Ｔ　倒置法とそうでないのとどっちがいい？

Ｃ　倒置法かな。

Ｔ　なんで？

Ｃ　川の流れなんてどうでもいい。ただぼーっと見ているという李白の状態が大事。

Ｔ　だから倒置法として読んでおいた方がいいんだね。李白がただ見るという行為そのものにスポットを当てることで、いかに孟浩然への惜別の情が強いものかを知ることができるね。